第五年第六号
昭和九年六月廿九日発行
針葉樹會報
通巻第三十六号

小櫛山と長城山

五月に入って初めてといふ好日和に喜びながら塩山駅に下車したのは十五日の午前四時十分である。何時の山行も必ず天候に恵まれるが矢張り日頃の心掛が良い為であらう。思ひがけなく駅前にバスが遊んでゐたので窪平まで行って貰ふ、一里半二人で五十銭は安い。窪平から畑中をダラ〳〵登りに城古寺、上田、西山、新地等の部落を過ぎると路はやがて渓に入り小櫛山へと導く。片雲すらない青空に初夏の富嶽がクッキリと白い姿を浮べてゐる、甲府の盆地には漸く暁が訪れて、塩山の丘が誠に小さく見える。半歳、山に遠ざかってゐた為に僅かの登りが脚に可成り應へる。無風流な雑木の灌木の中に可憐にも咲いた躑躅の赤い花は文字通り紅一点の感が深い。水は行く程もなく消えて、地図より愛甲石徹白な感じとは遥かに異った開闊な谷底に馬も通へそうにゆっくりジクザクにつけられて路をひた登りに登ると、やがて木櫛峠に出た。山麓中牧の人々は「木櫛峠金峯登山道」と称してゐるから、以前は相當に利用された路なのであらう。峠から苅アの平尾根を傳ふと小櫛山の頂上に着く、途中大分道草を食って表た心積であるがまだ午前九時半である。

頂上の展望は至って廣大である。肉眼の届く限り見えないものはないといふ日本晴で、四周の山々にあかず眺め入った。南アルプスの皚々たる連脈は黒く見えぬげである。残雪の姿は年々歳々変るごとなく、金峯五丈岩の右肩には美事な雪田を見せてゐる。欝蒼たる国師與千丈の山頂附近にも樹下に尚数尺の積雪を秘めてゐることであらう。木櫛山附近の山々は總じて樹林に乏しく、苅アの若くは僅かに灌木の疎林を見るのみである。故に山の壮厳味を欠くこと少くない。何故に植林しないのであらうか。樹木乏しき所に新緑の美しさなく、又潺々たる水の流れは求むべくもない。

頂上を焼山峠に向って降る。苅アを過ぎると、白樺、栗、櫟等が散見する。三十分にして峠に着

いた。まだ午前十一時なので、近頃出来たといふ冷鑛泉の金峯泉を探るべく、琴川に向つて緩傾斜の馬道を約二十分程降ると、俄然眼下に湖水が出現したので吃驚した。これは甲府電力の貯水池で金峯泉の宿はこの池畔にあつた。座敷に上つて弁當を開く、金峯泉は日本酒の如き色をした、冷泉で胃腸に特效ありと云ふ。入浴するよりも飲む方が效くらしい。創業七、八年で夏季は混雑するそうだ。正午再び燒山峠に戻り長城山に向ふ。一、七〇〇M峯の中腹を左に巻く予定であつた処、灌木の簇生に妨げられて頂上近くを巻いた。此の辺から長城山迄の間は参謀本部図幅が誤つてゐる様である。一、七〇〇M峯と長城山の間には尚二、三のピークが存在し、これ等の小峯を傳ふて、長城山の南方四、五丁の処で、乙め峠道に會し、この道を北進して長城山に達するのが順路の様に思はれる。地図には一、七〇〇M峯から直接一、七二五M峯へ傳ふのが順當らしく書いてあるが、この二峯間のギャップは可成下つてゐるから事実上この路は不利である。

晴天ではあるが行路に疑問を生じ、案外暇をつぶして了つたので午後一時漸く長城山頂に立つた。茅戸の平頂で展望は矢張り極めて開濶である。金峯山が一段と近く見え、その附近の重畳せる山波が手にとる如く望まれた。

尾根を搦んで黒平峠に通ずる路を傳ふ。案外昇り降りが少く至極気楽な路である。牧場の半壊の木柵に沿ふて行く辺りは、エキゾチックで可成り詩味に富んでゐる。

三時黒平峠に出た。附近に栗の木が多いらしく、鉄道の枕木が数多伐り出されて積まれてゐた。馬の足跡は枕木の運搬の為であらう。予定では茲から塩平に降り鼓川添ひに塩山に戻る筈であつたが、荒川新線五月の印象忘じ難く、遂に強行とは覺悟しつゝ黒平に向つて降ることにした。一歩荒川側を踏むと林相は俄かに変つて満る許りの新緑の中に包まれて了つた。楓、櫸等とりぐの新緑の間に點綴してゐる焚々たる山躑躅の紫の花は際立つて美しく、ジユーイ〳〵と鳴く小鳥の音も、足元を流るゝ小流のセゝラギも、相和し、相映じてすがすがしい初夏の深山の美しい姿を、遺憾なく現はしてゐる。此の山行の眞の目的は茲に初めて得られたのである。

三時半黒平の部落に降り、十年程前に五貫半程の重荷を負ふて金峯へと急いだ道―思出多き径に出た。新緑の猫坂峠は実に美しい。此の附近は全

山落葉松に蔽はれてゐるので、一杯に発芽した浅緑の一色に午後の日光が美しく照りはえた、その美事さは茲に拙筆の到底描き得る所でない。嘗て田部重治先生の「日本アルプスと秩父巡禮」なる書の中に「新緑」といふ名文を掲げられてあったが、新緑に対して先生程深く思索された人はあるまい。

五時半金櫻神社に着いた。休憩旁々大黒屋にて名物手打そばを喰ったが、その堅くて不味いのには驚いた。薄暮の裡に昇仙峡を降る。可成り急いだ心積であったが、天神平に着いた時は既に八時に近く、星が天に満ちてゐた。八時半の最終バスに乗って甲府駅前清水屋に投宿した、丸茂平造君が旅館に訪ねて来て呉れたのは非常に嬉しかった。疲労と不眠との為、仝君にはお気の毒をしたと思ってゐる。翌早朝午前二時発上りに乗った。

一、九三四、五、二三、　平家蟹

藏ひ損ねたスキー

もう初夏の候だといふのに玄関にはスキーが置いたなりになってゐる。勿論冬スキーだ。然し、不精で藏はないのではない。実は藏ひ損ねたのである。藏ひ損ねたと云っても藏ふ場所が無くなったのではない。実は藏ふに忍びないのである。

此シーズンには八度スキーに乗らうといふ計画だった。十二月一回、一月二回、二月二回、三月二回、四月一回といふ風に。十二月は五色の合宿へ行った。一月は外の川と日光へ行った。こゝまでは予定通りだった。処が二月になると第一日曜の四日が一橋新聞で先づ潰れ、それにそろ〳〵大阪行も始まって十一日、十八日がとられ、第四の二十五日に辛ふじて富士山へ行った。此辺からダイヤが崩れ出して来て三月に入ると御覧の通り

四日（第一日曜）雨、休　義
十一日（第二日曜）　霧ヶ峯
十八日（第三日曜）　子供と動物園
廿一日（春季皇霊祭）暴風
廿五日（第四日曜）　山本二郎氏追悼會

の始末で唯一回、最初の予定から云ふと七回の処五回しか行かない訳だ。此不成績は、幸ひ今年は大雪だから四月に取り返さうと思ってゐると、イケナイ、野球の練習が始まった。知ってる方は御承知のごとく思ふが、キャプテンたる者（貫録ありや否やは針葉樹會家族大會の　検定済際合格）まだ滑り足りないから野球の練習は困ると云ふ訳にはいかない。しかも春のシーズンは社内リーグ

戦に優勝しやうと野心満々たるものがあるのだから

第一日曜　營業部長から呼出
第二日曜　石神井球場にて練習
第三日曜　川崎球場にて練習
第四日曜　針葉樹會家族大會及川崎球場にて練習
第五日曜　子供を江の島へ

といふ工合で、テンデ滑る機會がない。四月に入つて取り返す処か、蔦々深みにはまつてしまつた。遂に五月の青葉になつた。いくら岩原でもむう雪はない。芝倉澤ならよさそうで、手塚にも誘はれたが冬スキーではぞつとしない。次の日曜は又大仮行。次は又野球！　あゝ、かくて八回の念願が五回に終つた残念さと、スキーに手入をして藏ふ程餘裕のある日曜を持たないことのために、カンカンやパナマがチラホラするやうな気節になつても、愛するスキーとストックとは不平も云はず、ジッと玄関番をしてゐるのだ。

七兵衛

おしやべり紀行

六月九日、梅雨前のむし暑い土曜日の午後、近ちやんと東中野の江口俊助さんのお宅へ新しい奥さんに敬意をー僕達の敬意は先方にとつては賛成だらうがー表しに行つた。泥棒の話から金儲の話、近ちやん得意の手相、朝顔を作る話まで、大分時間もたつた。十幾つ目かの小菊饅頭を口へほうりこんで「明日は何処かへ行き度いお」。と俊助さんが云つた。

「そうだね。朝出て何処かブラ〳〵歩いて風呂に入つて帰つて来る処が好いね」。と近ちやんが云ふ。脂が多いせいか、近ちやんは何処かと云ふすぐ風呂に入つてと云ふ。

「ペンちやん、どうだい」と俊助さん。

ハイキングとか、ことに暑いのに近処の山へ行くと云ふ事には余り気が進まない僕は。

「アヽ」と丈け気の無い返事をした。

近「氷川から歩いて小河内の風呂にでも入つて来ようぢやないか」。

俊「そいつが好いや。ペンちやんもおいでよ」。

「僕はどうしようかな」と俊助さんの顔を見たら一本気の強い気性を表はすとか云ふ太い眉毛がキリッとしまつて見えた。

「行くんだらう」。とおつかぶせる様に近ちやんが云つて眼鏡の後から大きな眼を光らせた。余

りこわいので、不覚にも、「行こうかな」。と云ったら、

「ぢや行くね。明日の朝七時、新宿一番線。切符は御嶽まで買ふんだよ。弁當は晝飯を持って行くこと。ぢや俊助さん、御馳走さま、さよなら」。

アッと云ふ間も無くきめちやってるんだから、もう仕方がない。

六月十日

新宿でおち合って電車の中で川乗山に行くことにした。御嶽駅から氷川行の自動車に乗る。女車掌に、

「棚沢まで三人」。

「鳩の巣ですか」

「いや棚沢だよ」

「ぢや鳩の巣でせう」

「鳩の巣か雀の巣か知らないが、川乗山へ行きたいんだから」。

「川乗山なら大正橋と鳩の巣と両方から行けますが」

五万分の一の地図を開いて

「此処だよ」。と云ったら

「こへなら、鳩の巣に切ってをきませう」。

事実棚沢の部落のすぐ下が、名勝鳩の巣ある渓流があるのだった。だが、測量部の地図を一目見てすぐ分ったのは相當なものだと感心した。其処から峰の部落の上を通って川乗山に向ふ。時々陽はさすが大体曇って、思った程暑くもないが、少し歩いては休み、風が涼しいと云っては休み、水を飲みに行っては休み、坐り心地が好いと云っては休み、急ぐのはシロウトだと云っては休み、何とか云っては休み、何も云はないで休み、休んでばかり居た。然し口丈けは休んでる時も歩いてる時も絶えずしやべり続けてゐた。川乗山の頂上へついたのは一時過ぎてゐたであらう。新聞、包紙、キャラメルの箱、空罐、チョコレートの銀紙、弁當の空箱が、よくまあと感心する位雑然と散らばってゐた。曇ってはゐるが北は武甲が霞んで見え、西は雲取が霞んで見え南は大嶽が霞んで見え、東は霞んで何も見えなかった。頂上は早々退去して、獅子口の小屋へ下りて、日向沢を大丹波へと下る。その道すがら勝手なことをしやべり、好きなものを唱ひ、天下泰平の熱をあげて大丹波の村近くまで来た。

「よく一日飽きずに皆しやべり続けて来たものだね。一つ皆で黙って歩こうぢやないかし。」

「よし。ぢや、しやべっちやいけないんだねし。」

無言の行となると、その前に、出来る丈け何か云ってをかないと気がすまない。

「一寸待ってくれ、あくびや咳はどうなんだい」。

「そいつあ、仕方がない」。

「ぢや独り言は」。

「いけないね、さあ始めるよ」。

それから急に黙々として往く。

今まで物を云ってた奴が急にだまるんだから頻を見てもおかしくなってプッと噴き出す。それでもしやべれない。「腹ふくるる」。腹の中で云ひながら歩いてると咽喉から何かこみあげて来る様だ。相當苦しい。五分間ばかりどうにか歩いたが詰からともなしにつまんないことよそうぢやないかと云ふ。以前にも増して、またしやべる。口に税金がかゝらなくて仕合せだ。

川井から自動車で御嶽駅へ来て駅前でビールを飲んだ。床几にねころんだら、もう暗い空に星が見える。好い気持だな。今日は来てほんとによかったと思った。そして今日は歩きに来たのではなくて、しやべりに来たのだと思った。川乗山だって何処だってかまわない無駄口をたゝける連中と歩いてればそれで好いのだと思った。

ペン

山のうち

丸そ山に縁の遠いアスファルトと混凝土の街、東京の真中で毎日アクセク働き続けてゐる僕を友達はどう思ってゐるのだらう。誘はれても動かない、山の本も買はない。いまぢや誰も彼もあきらめたのか誘っても呉れなくなった。この僕の隠れた楽みはラッシュアッーの省線が神田秋葉原あたりを走る頃、窓の内から灰かに望む山の姿ーこれだけがいまだに僕に許されるエンジョイなのだなんと果敢ない。その僕が思ひがけなく山の臭を嗅いだのだ何年ぶりかで。假令それが物見遊山本位な會社の旅行であるにもせよ、たとひ晴れて山とは言ひ得ない程の低山であらうとも。何処？箱根さ、明神ヶ岳さ。然し笑っちやいけない。僕は真面目なんだ。僕は立派な山として登ったのだ。久しく登りつけない僕の足は真剣な動きで運ばれたのだ。霧雨に包まれて打煙った山路を、ひとり群かり離れて登り辿る時、心の奥底から僕は山歩きの陶酔感にひたったのだ。功名も野心もない寂びた旅の心。これを流石としての山旅、思ひ所あってする登山とくらべて僕は初めて純粋な山への愛を覺ったのだ。贅沢な身分の時と苦労する時とは山の味ひ方にまで差のあるものなのだ。箱根と聞いて嘲笑する人があったらおいでなさい。箱根山でも山のうち。

（オー）